SORA

web magazine 2013.jan. vol.06

TAHITI

タヒチ

MAP CLICK!

2012 年末に世界一周を果たした竹沢うるまが捉えたタヒチの SORA。
マンタが踊りクジラが歌う神秘的な海に魅了され、美しい自然に癒される旅へ!

●写真・文／竹沢うるま

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
tsumishima.com
(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp
© 2012
World Tour Planners Co.,Ltd.
All Rights Reserved.

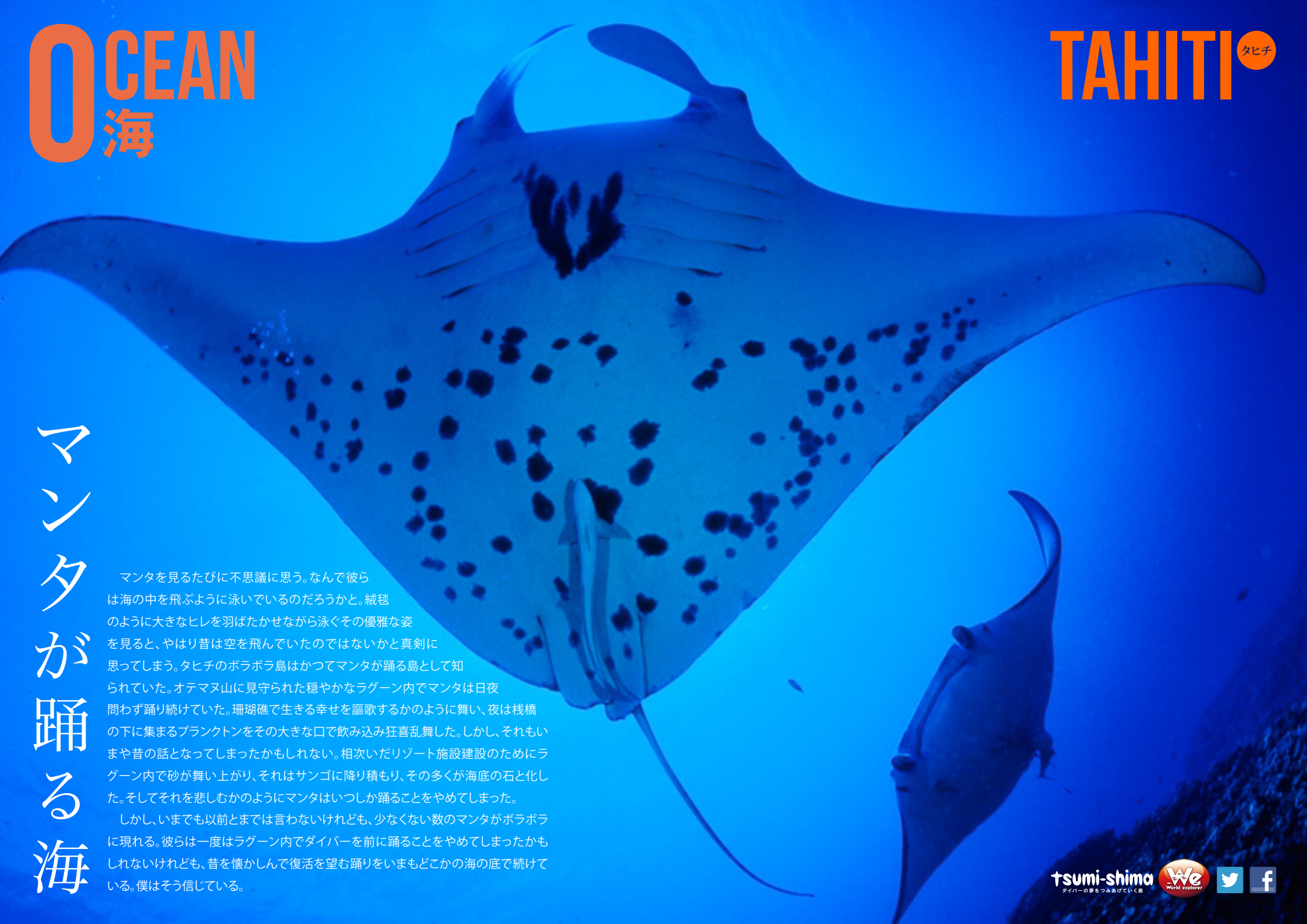
SURPRISE 驚き

TAHITI タヒチ

熱帯鳥が見た島

南の島に行くと、真っ白な体をした綺麗な熱帯鳥が青い空に吸い込まれるように飛んでいるのをよく見かける。白い砂浜に寝転びながらその様子を見るたびに、一体、あの鳥はいまどんな風景を見ているのだろうと不思議に思うことがある。ヘリコプターに乗り込み初めてタヒチの島々を空から眺めたとき、その言葉では表しきれないほどの美しい風景を目の当たりにして、驚いた。外洋の海の蒼さ。リーフで砕ける波の透明感。ラグーンのなんとも形容しようのない鮮やかな海の色。そしてそれらを見守るように浮かぶ緑深き島。熱帯鳥はこんな景色を毎日見ているのか。真っ白な羽を大きく広げ、上昇気流を掴み、南太平洋に浮かぶこの奇跡としか言いようのない美しい島々を眼下に毎日飛んでいるのか。ヘリコプターがソシエテ諸島の島々の上空をまわり、やがてツパイ島上空に辿り着いた時、またしても言葉を失った。そこでは海の真ん中にハートが浮かび上がっていたのである。心の底から熱帯鳥の翼が羨ましいと思った瞬間だった。

tsumi-shima ダイバーの夢をつみあげていく島



マンタが踊る海

マンタを見るたびに不思議に思う。なんで彼らは海の中を飛ぶように泳いでいるのだろうかと。絨毯のように大きなヒレを羽ばたかせながら泳ぐその優雅な姿を見ると、やはり昔は空を飛んでいたのではないかと真剣に思ってしまう。タヒチのボラボラ島はかつてマンタが踊る島として知られていた。オテマヌ山に見守られた穏やかなラグーン内でマンタは日夜問わず踊り続けていた。珊瑚礁で生きる幸せを謳歌するかのように舞い、夜は桟橋の下に集まるプランクトンをその大きな口で飲み込み狂喜乱舞した。しかし、それもいまや昔の話となってしまったかもしれない。相次いだリゾート施設建設のためにラグーン内で砂が舞い上がり、それはサンゴに降り積もり、その多くが海底の石と化した。そしてそれを悲しむかのようにマンタはいつしか踊ることをやめてしまった。

しかし、いまでも以前とまでは言わないけれども、少なくない数のマンタがボラボラに現れる。彼らは一度はラグーン内でダイバーを前に踊ることをやめてしまったかもしれないけれども、昔を懐かしんで復活を望む踊りをいまもどこかの海の底で続けている。僕はそう信じている。

tsumi-shima ダイバーの夢をつみあげていく島 We World explorer

クジラが旅する星

ROMANCE
ロマン

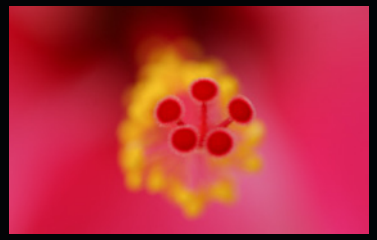
タヒチ、ボラボラ島の沖で水中撮影をしていた時のこと、魚の群れの写真を撮っていると、海の深部から、不思議な音が聞こえて来た。その音は耳の鼓膜にというよりかは、タヒチの透明度の高い海の水を振動させて、直接、体に伝わって来るような音だった。水面にあがると、ボートの上でキャプテンが、意味ありげにあごで島の沖を指した。クジラだ。カメラ片手に海に戻る。そのクジラはこちらに気がつくと、人間に初めて見たのだろうか. 好奇心を秘めた大きな瞳で見つめてきた。不思議な時間だった。まるでこの広い海のなかに、僕とこのクジラしか存在していないような感覚。やがて僕の存在に飽きたクジラは沖へと泳ぎ去った。

時々、このタヒチで出会ったクジラのことを思い出す。あの後、彼らはしばらくタヒチの温かい海で過ごし、また南氷洋に向けて大海原へと旅に出たのだろうか。その孤独な旅のことを想像する。何もない深くて濃い海。見えるのは蒼い色だけ。そこを何日も、何ヶ月も、何年も旅をする。時折気が向けば歌い、泳ぐことに飽きれば水面を跳ねる。凪の日も、嵐の日も、いくつもの波を越えて、どんな時でも一人で旅を続ける。寂しくないのだろうか。つらくはないのだろうか。広大な海を旅するクジラの孤独のことを考えると、自身が抱える孤独感は和らぎ、前に向かって頑張ろうという気持ちを少しだけもらえる気がするのであった。

TAHITI タヒチ

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
We World explorer

海の言葉



ACTION 行動

タヒチ、ツァモツ諸島の島々を歩く。鋭い太陽光線がヤシの葉を通り抜け、緑のやさしい光となって浜辺にいるこの体を包み込む。サンゴが砕けてできた白砂の道が、島の北側の浜へと続く。裸足の裏から伝わる島の暖かさ。緑に包まれたヤシ林の奥から、時折、何かの鳴き声が聞こえる。浜へ向かう足を止め小道の脇にあるパンノキの木陰に腰を下ろす。遠くでリーフで砕ける波の音がする。この甘いにおいはイランイランの花だろうか。

タヒチのような南の島で日々を過ごしていると、少しずつ本来の自分を取り戻して行くような感覚が生まれる。自分は本当はどんな人間で、何を望んでいて、何を望んでいないのか。何が必要で、何が必要ではないのか。海を前にするといろんなことが心の奥底まで響いて来る。自然の中で必要なのは自分であること。それだけ。できることはできるし、できないことはできない。そうやって普段の生活で、どれだけ自分は自己防衛のためにいろんなものを身に着けているのかを思い知らされる。海はいつだってそのことを僕に再確認させてくれる。それはまるで満ちては引く波のリズムに合わせて海が語りかけて来るような感じなのである。

水平線に沈む夕陽を眺めながら、砕ける波の音を聞きながら、星空に思いを馳せながら、いままで何度もここタヒチの島々で海の言葉を聞いたような気がするのであった。

TAHITI タヒチ

Information

●国名：フランス領ポリネシア ●ビザ：30日以内の観光目的の滞在ならビザは不要。31日以上の滞在になる場合は、在日フランス大使館でビザ申請を行う。●パスポート残存期間：帰国時に有効期限が3ヵ月以上。●言葉：現地語はタヒチ語。公用語はフランス語が利用されているが、ホテル、主要レストランでは英語も通じる。●両替：両替はファアア国際空港の銀行やそのほか各銀行の支店、自動両替機でできる。●時差：日本より19時間遅れ。日本が正午のときタヒチは前日の午後5時。●電圧：電圧は220V、60HzでプラグはAもしくはC。●水：ミネラルウォーターの飲料が無難。●行き方：日本からフレンチポリネシアまでのフライトは直行便で約11時間。

tsumi-shima ダイバーの夢をつみあげていく島
We World explorer